オレと浦安三社祭

いよいよ8年ぶりに、浦安三社例大祭が開催されます。この8年間で町の景観や、住む人も変わりました。本当に、色々ありましたね。8年ぶりの開催ということで、改めて浦安三社祭を取材させていただくと、世代を超えて地域の祭りのために協力する氏子さん達の姿が格好良く、浦安三社祭の未来のために奮闘している姿を見ることができました。伝統的なお祭りだから、時には煩わしさを感じることもあるかもしれませんが、そこには涙が出るほどの人の温かさがあり、そんな町の人同士の人間臭さが垣間見え、「この時代に必要不可欠な祭りかもしれない」と感じました。

絵画で切り取る

移りゆく浦安の風景を描く

今月の表紙

八年振りの【浦安三社祭】を祝い、楽しむ！

三島　章

「まえだ！」（まいだ）、「まえだ！」（まいだ）いなせな神輿の担ぎ手の、身体を張った威勢の好い掛け声に…「！」、周りの老若男女も皆で掛け声に対応して街中を練り歩く、稲荷神社・豊受神社・清瀧神社を起点とする、大正以来の海辺のふるさと【浦安】の季節の祭り風情が、本当に久しぶりに戻ってきます。

祭りを近隣の皆様と共に大いに囃したいと願い、前回２０１６年６月、豊受神社での宮入を描いた作品ですが、今でも掛け声が響いているように思えます。稲荷神社は穀物豊穣の神、豊受神社は豊受姫大神、清瀧神社は海上安全の神に由来するそうです。それぞれ個性豊かな、神輿の繊細・緻密なパーツの造形美、特に駒札（神輿の所属）、飾り紐（神社毎に色違い）、紐房にも大注目ですね。昼は昼、宵は宵で祭りの雰囲気を満喫できる期待の祭りと感じております。

国内外では戦争・紛争が絶えませんが、祭りの喜びを市民皆で共有し、「非核平和都市宣言」にふさわしい、人と人との和、「平和」を、願いつつ、未来に向けて大祭を囃したいものです。

ゆうゆう手帖　表紙絵紹介

「日の出水彩クラブ」所属の皆さん

2022 年～のゆうゆう手帖表紙絵担当は、日の出公民館で活動をされている「日の出水彩クラブ」の皆さん。担当いただく方は毎号変わる予定です。四季折々の浦安の風景を、それぞれの個性あふれる素敵な水彩画でお楽しみください。

日の出水彩クラブ…2012 年、日の出公民館主催事業「初めての人の水彩教室」としてスタート。2018 年より現講師の山﨑勝哉さんを迎え、現在会員 14 名で活動中。平均年齢 75 歳、初心者からの入会が多く、男女ともに和気あいあいと自由な画風で創作。【会員作品出展例】市美術展 / アイラブ浦安展 / 日の出公民館文化祭 / オリエンタルホテルギャラリー

オレと浦安三社祭 その1

神輿の先頭を切る山車。山車組の役割とは…

晴天に恵まれた5月上旬の土曜日。この時期には珍しい汗ばむ陽気の中、稲荷神社境内では十数人の方々が立派な山車を組み上げている真っ最中でした。「祭りが終わったら解体し、また祭り前に組み直すんですよ」そう教えてくれたのが、稲荷神社山車組の榎本俊夫さん。生まれたときから三社祭があり「三社祭は身体の一部のようなもの」という榎本さんは、若い頃は担ぎ手として神輿を担ぎ、50代で稲荷神社の総代となって祭りをまとめる役割を担っていました。「昔は各神社・各地域が個々に行っていた祭りですが、自分が総代の頃に各神社の会の人たちが仲良くなって、三社で一緒にやろうってなったんです」。祭りの名前が浦安三社例大祭となったのもその頃、2000年開催の時からなんだそう。「最初の企画から全て地域の人で作り上げている祭りって、他ではなかなか無いと思うんですよね。中止となった時期はあったけれど、そんな祭りが100年以上続いていることは誇らしいし、我々も後世に受け継いでいかなければならないと思っています」。今年は叶わなかったけれど、いつか清瀧・稲荷・豊受の三神社の神輿が同じルートを渡御できたら…未来へ

【語り手】
稲荷神社
山車組
榎本 俊夫さん

未来の三社祭を担う子どもたちへ
祭りの楽しさを伝える「山車組」。
「だって、祭りだから」その言葉に
詰まった浦安三社祭への想い。

の希望として託したいと、榎本さんは朗らかに笑います。

そんな榎本さんが担当する「山車組」も、次の世代へと祭りを繋げる重要な役割を持っています。「昔は山車を専門に扱う組があったんだけど、無くなってしまってね。今は地域の氏子の中から毎回選出されて、『山車組』として山車を担当します」。山車組に選出されるのは、かつて総代や世話人を担われたベテランの方がほとんどだそう。祭り当日、山車にはお囃子隊が乗り先頭を切って宮神輿を誘導、そしてそんな山車を引くのは地域の子ども達です。どうして子ども達なのか、伺うと「先頭を切って神輿を誘導するって、なかなか出来る体験じゃないじゃない」と榎本さん。「ワクワクする、楽しい！って子ども達が感じてくれて、次の祭りにも参加したいと思ってくれる。そうやって三社祭は続いていく、私が子どもの時もそうだったから」。山車から始まり、子ども神輿、宮神輿の担ぎ手、そして総代や世話人として祭りの中心となってきた方々が、第一線を次の世代に託し、また山車へと戻ってきて、今度は未来の三社祭を担うであろう子ども達のお世話をする…ぐるっと巡るような、そんな地域の人たちの関係がとても素敵で、この地域に生まれた子ども達が羨ましくも思いました。

休みの日にも関わらずこうやって多くの方が集まり祭りの準備をする、大変ではないですか?と伺うと「だって、祭りだから」と今日一番の笑顔で話す榎本さん。「祭りだから」…この言葉に全てが詰まっているように感じました。

山車を組み立てる作業風景。業者の方が来るのではなく、全て地域の方で組み上げるというから驚きます。右写真は子ども達が山車を引くための組紐、長い！

稲荷神社社務所に飾られている歴代の総代・世話人の方々。榎本さんのお父様が写っているものもあり、三社祭の歴史を感じました。

オレと浦安三社祭 その2

担いでも担がなくても楽しめるものがある…

清瀧神社の「飾る会」ができたのは今から20年前。50年以上も続いている「祭栄会」や「浦安獅子睦会」の中からできた、新しい会です。提灯の飾り付けは豊受神社の西組が始めたものでしたが、それがとても素敵だったそうで「良いものは良い！」と、前飾る会会長の山﨑康弘さんが清瀧神社でも提灯点灯式を行ったんだそう。すでに神社の前には飾る会仕切りの元、祭栄会、浦安獅子睦会の皆さんの協力で提灯が飾られ、夜には明かりが灯り、祭りを今か今かと待ち望む街並みになっています。

準備を進める氏子の皆さんですが、今年は8年ぶりの開催ということもあり「少し不安を感じることもあるんです」と話すのは、清瀧神社飾る会の長野勝彦さんです。「子どもの頃に見たり体験したお祭りは忘れられないもの。私が小学3年生位の時、大人がお神輿を担ぐ姿はカッコよくて、大人たちが楽しんでいる姿が記憶に残っています。その頃の子ども達が今大人になって、次の世代に繋いでいっているわけだけど、一度中止になって8年もたっているから、小さな子ども達がどれだけお祭りを楽しんでくれるか…」。三社祭がない年には神社で子ども祭を行ったり、節分や初詣などの年中行事を行うことで、少しでも子ども達が身近に神社と触れ合う機会を作ってきた会の皆さん。それも三社祭を後世に繋げるために大切な一つの役割なんだそう。「前回の三社祭を覚えていなくても、今年のお祭りに参加、見物をして、この高揚感を全身で感じてほしいです。私は担いだりするタイプではないけれど、やっぱり担ぎ手はカッコいいし、子ども達が全力で楽しむ光景も良いものです」。どの年代の方でも楽しめる魅力が、三社祭にはたくさん詰まっているのですね。

清瀧神社の宮神輿を任されている獅子睦会 会長の池田肇さんと、祭栄会 会長の岡﨑善行さんは、8年ぶりの大祭で世代交代があり、今年初めて会長として組を仕切ることになったとか。「清瀧神社の漆塗りの神輿は、今年でちょうど100年目になるんです」と池田会長。八ツ棟作りと言われる珍しい屋根を施した漆塗りの立派な神輿は、もともとは飾り神輿として作られたものだそうで見ごたえも十分。神輿彫刻を見に来る方も多いんだそう。そんな神輿を当時の浦安の方々が、皆でお金を出し合い作ってから100年…記念すべき年ですね。また、「安全に渡御するのは簡単なものではない」と話すのが祭栄会の岡崎会長。「宮神輿を担ぐ会として責任をもって、時間通りに神社にお返しできるように、また怪我がないように安全に渡御のサポート指示をしていきたいです。また、自分たちの美学を持ってお神輿を担がせてもらいたいです」と気合十分！

その昔、漁師町の血気盛んな若者たちの荒々しい担ぎ方から「暴れ神輿」「喧嘩神輿」などと異名がついた浦安の神輿ですが、今では他地域の祭りで「浦安三社祭の『地すり』をやってみたい！」と、担ぎ方を真似する地域もあるそうです。担ぐだけではない浦安三社祭の魅力を、思いっきり楽しみたいですね！

【語り手】
清瀧神社
飾る会
長野 勝彦さん

それぞれが自分のできることをやり
町のお祭りを作っていく。
昔の日本のような共同体意識が残る
町を、子ども達へ。

清瀧神社の宮神輿を任されている獅子睦 池田さん（左）と祭栄会 岡崎さん（右）。提灯を担当する飾る会 長野さん（真ん中）。

15日と16日で渡御ルートが変わります
通過目安時間もチェック

清瀧神社・稲荷神社・豊受神社 お神輿渡御ルートマップ

WEBでも渡御ルートを確認できます！

浦安三社例大祭 6月 宵宮 14日(金) 神輿渡御 15日(土) 神輿渡御 16日(日)

オレと浦安三社祭 その3

神輿渡御が安全に行われるために。氏子の想いとは…

遊ばせてもらった側から、これからは〝遊ばせる側〟へ。安全に遂行し、これからもずっと続く、浦安三社祭となるために…。

【語り手】
豊受神社 西組 会長
熊川 尚裕さん

「初めて三社祭に参加したのは小学生の時。子ども神輿から始まって、それ以来ずっと三社祭に携わっています」そう話すのは豊受神社 西組の会長を務める熊川尚裕さん。祭りが終わった瞬間から次の祭りの準備がはじまる…4年（今回は8年）かけて祭りの準備をすると聞き驚いていると「準備をしていると あっと言う間ですよ」とカラっとした笑顔で話します。

お父様が西組だったこともあって西組に入り、以来神輿を担ぎ、自然な流れで役員になった熊川さん。今回は特に8年ぶりの開催ということで、皆さんも神輿担ぎを楽しみにしているのでは？と伺うと「役員は神輿は担がない」と言うから驚きました。市内市外からたくさんの人が集まり多い年は100基以上の神輿や山車が渡御する浦安三社祭。人でごった返すそんな環境を、車・見学者・担ぎ手が安全に楽しめるように細心の注意を払って整備してくれるのが、熊川さんのような各会に所属する役員の方々。大きな事故もなく、毎回開催許可が降りるのは、そんな役員の人たちが作ってくれる万全の体制があったからなんですね。「若い頃は大きい神輿を担いで、それがとても楽しかった！でもそれは当時の役員の方々が安全に担げるように誘導してくれていたから。今度は私達が遊ばせる側。皆さんが安全に楽しめるように尽力します」。祭りに参加する以上、神輿を担ぎたいという想いはあるはず。それでも、先代と祭りへの恩返しのように自分達は祭りのサポート役を全うする。こうして祭りの楽しさや興奮が受け継がれ、後世へと続くものになる…役員の方々の心意気に胸を打たれました。

現在の課題は「後継者」。かつて20代30代で構成されていた西組役員も、今は40歳以上の方がほとんどだそう。若い担ぎ手たちが祭りを楽しみ、次も参加したい！と思う気持ちは三社祭を後世に残していく糧となります。三社祭を次の世代に繋げていくためにも「もっと若い人達に参加して楽しんでほしい」と熊川さんは言います。「参加することで三社祭ってどんなものなのか分かることもあるので。西組でも、一緒に祭りを盛り上げてくれる人を募集していますよ！」

豊受神社 西組は市内でも大きな会のひとつ。8年前は神酒所にバーカウンターが出来たり、「三社祭と言えば」の一つとなりつつある「提灯飾り」は西組が始めた取り組みだったりと、個性豊かな方々が集まる西組はいつも新しいことが始まりそうなワクワク感に溢れています。それも若い世代に繋げたい想いから？と伺うと「いや、ただ変わった人が集まってるだけだよ」と熊川さんは笑うけれど、そんなオープンな雰囲気に親しみを感じ「祭りに参加してみたい！」と思う若い世代の人も多いはず。

地域の人で作り上げられる浦安三社祭。開催の日が待ち遠しいです。

庚申通りは特に例年人でごった返すスポットの一つ。揃いの半纏を着た役員が目を光らせ、安全に神輿渡御が行われるよう誘導しています。

5月中旬に完成した西組神酒所前で西組の方々と。「いらっしゃーい」と気さくな笑顔で迎え入れてくれるから嬉しくなります。